東女医大誌　第74巻　第4号
頁　227～229　平成16年4月

学術情報

第22回東京女子医科大学在宅医療研究会

日　時：2003年7月12日（土）13:00～16:00
場　所：臨床講堂II

会長挨拶　会長（泌尿器科学）東間　紘
開会の辞および「第二病院における在宅医療の現状」　当番世話人（第二病院 在宅医療部）大塚邦明
一般演題I　座長（第二病院 在宅医療部）山中　崇

1. 東京女子医科大学病院との病診連携について
（新宿ヒロクリニック）英　裕雄
2. 在宅医療での薬剤師の情報提供と薬-薬連携
（薬剤部）木村桂子
3. 在宅末期がん診療における強オピオイド使用率の検討
（あおぞら診療所）和田忠志

一般演題II　座長（第二病院 4階内科病棟）中村千恵子

4. 婦人科がん患者の在宅移行における看護の現状
（婦人科病棟）濱田聖子・本宮純子・柳澤瑞保・青木華奈子・豊見山則子・東　光
5. 重度心疾患を持つ患児の外泊援助
（心研6階）市川智加・廣川友香・市ノ瀬美貴子・宮崎歌津枝
6. 長期在宅医療の継続が家族のQOLに与える影響
（第二病院 看護部）町屋千鶴子

一般演題III　座長（第二病院 看護部）町屋千鶴子

7. 在宅における看護師のスキルアップ―訪問看護師養成講座を開講して―
（セコム医療システム株式会社 看護部）小西優子
8. 在宅人工呼吸療法実施中のALS療養者におけるカフレーターの導入に関する検討
（東京都立保健科学大学 大学院）水野優季
（東京都神経科学総合研究所）小倉朗子
（東京都立保健科学大学）川村佐和子
9. 在宅療養患者に関わる関係機関との連携を考える
―MSWがやりにくさを感じた在宅神経難病患者の事例より―
（第二病院 看護部）鎌野真理子・長谷川美穂
10. 「第二病院在宅医療部」9年間の経過報告
（第二病院 在宅医療部）山崎八重子・森田文代

閉会の辞　（第二病院 在宅医療部）山中　崇

在宅医療での薬剤師の情報提供と薬－薬連携

（薬剤部，*在宅医療部）木村桂子・土谷隆紀・大堀洋子*・篠　聡子*・長井浜江*・有賀悦子*・藤井惠美子

〔目的〕安全で効率的な在宅移行のための情報提供について薬剤師がどのように関わることができるかを考える目的で情報提供の内容を調査した．さらに，情報提供には保険調剤薬局との連携が重要であると考えその特徴についても明らかにした．

〔方法〕平成10年10月～15年6月に関与した全症例（中心静脈栄養法施行，経管経腸栄養法施行，多剤服用の高齢者，塩酸モルヒネ使用等）について，必要に応じて作成した情報提供書の内容を医療処置ごとに分類し，保険調剤薬局宛の情報についても同様に分類し調査した．

〔結果・考察〕全症例で情報提供の内容は医療処置ごとに共通していたが，保険調剤薬局へ提供する情報には

特徴があった．在宅移行を速やかで安全にするには情報内容の充実のみでは不十分で，保険調剤薬局選択のための全国的な情報整備が必要と考えられる．

在宅末期癌診療における強オピオイド使用率の検討—予備調査報告—

（あおぞら診療所）　和田忠志・前田浩利・川越正平・北田志郎

あおぞら診療所は千葉県松戸市にある，在宅医療を主に行う診療所である．1999年4月開設時から2004年6月末日までの導入在宅患者485名のうち，死亡は202名，うち癌死亡105名，癌自宅死亡67名である．疼痛には積極的な緩和を行う．

在宅末期癌診療において，積極的緩和ケアを行う場合でも，麻薬を要しない患者がかなり存在することが経験されていた．1999年4月1日～2003年7月3日に在宅診療を行い，死亡した悪性疾患の患者107名を対象とし，在宅医療施行中の強オピオイド使用状況に検討を加えた．

全死亡者・在宅死亡者ともに自宅療養中の麻薬使用率はほぼ5割であった．50代，60代で麻薬使用が多い傾向がみられ，70代，80代では比較的使用は少なく，90代では使用例はなかった．在宅末期癌診療において，あおぞら診療所では5割の麻薬使用率であり，半数は麻薬を要しないことが明確となった．今後，症例を蓄積し，より詳細な分析を加えたい．

婦人科癌患者の在宅移行における看護の現状

（中央6階病棟婦人科）　濱田聖子・本宮純子・柳澤瑞保・青木華奈子・豊見山則子・東　光

婦人科病棟は，癌患者の在宅移行へ最初に関わるところでもある．2000年1月から2002年7月まで，当病棟に入院した患者延べ1871名を対象に，治療目的，退院の転帰，在宅医療部の介入内容を調査した．そして，その看護の現状を検討した．手術，化学療法を目的とした患者が1781名（95%）を占めた．在宅医療部の介入は，その他90名中30名（1.60%）で，主な介入内容は疼痛緩和だった．また，病棟で死亡した患者は，29名で癌患者だった．在宅移行の看護は，麻薬を含む疼痛緩和と中心静脈栄養管理指導などであった．病棟ナースの看護経験年数は，3.24年間で，在宅医療に関わったプライマリーナースは，全体の16%だった．問題点として，患者が在宅ケアを望んでない，看護師の経験年数が若いなどがあげられた．昨年，緩和ケア病棟が開設し，病棟の役割が変化しつつある．在宅医療部や緩和ケア病棟も含め，患者，家族へ在宅ケアもひとつの選択肢として，準備体制を整えておくことが今後の課題と考えた．

重症心疾患を持つ患児の外泊援助

（心研6階）　市川智加・廣川友香・市ノ瀬美貴子・宮崎歌津枝

当科では，外科的治療ができず内科的治療を受けながら終末期に至る患児も多く，病院で死を迎えることがある．終末期を病院で過ごす患児にとって“家に帰る”ことは目標であり，希望である．今回，重症心不全であった患児が一泊外泊ではあるが，その希望を叶えることができたので報告する．

Nちゃん，拡張型心筋症で自閉症でもある10歳の女児．長期に渡り内科的治療を受けていたが改善みられないためカテコラミン，利尿剤の持続投与も開始された．患児は自分の身体変化を感じ取り，退院を切望する発言が多くみられるようになった．母も患児の意識があるうちに家に帰らせてあげたいと思われるようになり，急激な状態の変化を覚悟の上で外泊を希望された．外泊に当たって患児の現状，諸費用，リスクなど問題は大きかったが，在宅医療部の協力を得て“家に帰る”ことができた．今回の援助を通して，他職種との連携の重要性を痛感した．

長期在宅医療の継続が家族のQOLに与える影響

（第二病院 看護部）　町屋千鶴子

〔目的〕長期在宅医療の継続が，療養者の家族のQOLに与える影響について明らかにする．〔方法〕当院から訪問看護を行い，在宅医療を5年以上継続している2事例とその主介護者，診療記録，看護記録である．野島の家族の質の考え方を基に質問票を作成し，主介護者にインタビューと聞き取りを加えて行った．〔事例紹介〕事例1: M氏30歳男性，進行性筋ジストロフィー，人工呼吸器を装着，母親と2人暮し，主介護者は母親66歳．事例2: I氏33歳女性，エプシュタイン奇形，経鼻胃管栄養，両親と3人暮し．主介護者は母親55歳，父親の協力がある．〔まとめ〕家族が一緒に生活できることを可能にする．家族は，生活の中から家族の力を生み出していた．家族以外のサービス提供者との関係性にストレスを生じやすい．主介護者は身体的影響を大きく受けていた．

在宅における看護師のスキルアップ—訪問看護師養成講座を開講して—

（セコム医療システム株式会社 看護部）　小西優子

〔はじめに〕施設内と在宅における看護は，本質的には同じである．しかし，看護師は在宅療養者の生活フィールドで看護をするということに予想以上の戸惑いを感じる．この戸惑いはスキルアップのチャンスである．戸惑っている訪問看護師のスキルアップに，また一歩を踏み出せずにいる潜在看護師の背中を押す機会になるように，今回，訪問看護師養成講座を開講したので報告する．

〔講座の実際〕①目的．②内容および日程　Step 1：マスターステップ，Step 2：スキルアップステップ．③方法　イメージする：事例，実物提示，施設見学．実践する：演習，ロールプレイング．自ら考える：プレゼン